高校の部　最優秀賞

新しい社会のために

島根県立大田高等学校　1年
篠原悠里（しのはら　ゆうり）

去年の秋に、東京都の公立高校入試では男女別定員があることを知った。男子と女子の合格ラインが異なり、合格した男子と同じ成績でも女子は同じ高校に入学できないという事実。都民でもないのに、ショック、驚き、腹も立った。すぐにネットニュースを確認した。「東京都では、男子校より遥かに女子校の方が多いから、男女別定員制は仕方がない」と肯定する意見も多く目にする。男女別定員は仕方のないことなのか。私は、成績順に入学させるものだと思っていたし、受験生だったから、東京に住む女子にふりかかっていることが他人事に感じられなかった。それからは、今まで意識を向けることのなかった男女で区別されている事実や制度、分野について気に留めるようになった。

そういえば、と数年前に女性や浪人生に対して一律減点していた大学があったことも思い出した。当時のニュースでは、「女性は皮膚科医や眼科医になる人が多く、仕事がハードな外科医を希望する人

は少ないため男性を多くとる必要があったのだ。」と大学側の説明が伝えられた。似たようなことは、職種を越えてたびたび議論になっていないか。「女性は子育てがあるから」と、男女の職種を分ける理由付けをする。しかし、「なぜ女性が皮膚科医や眼科医を選ぶのか」ということに焦点が十分当てられていないと思う。制度は整っても、実際はなかなか理想に追いつかない。海外では、医師の労働時間制限があり、日本より働きやすい環境作りをしているらしい。もちろん日本でも、男性だけ、女性だけではなくて「男性でも女性でも働きやすい社会」を目指している。けれど、この手の話題はよく「男性ＶＳ女性」という構図になり、その戦いに終わりは見えづらい。この状況は変化しないのだろうか。適した人材が適したポジションに就けないのはとてももったいないことだと感じる。

人は、「ある立場」に置かれると、アンテナが向き、敏感に情報をキャッチするということがたくさんある。私も幼い時には人権の意識を感じることはほとんどなく、聞いて偏っているという事実は理解しても、心に刺さる、当事者の痛みを感じることはきっと無かったと思う。今でも、「人権」と聞くと、うまく整理して説明はできないと感じる。けれど、「人権」について考える事柄やきっかけはそこら

中に転がっている。その立場になって考えてみるとゆがみや理不尽さに気づき、心がささくれる。

大田高校の前身の旧制中学校が開校したのと同じ一九二一年に発行された与謝野晶子の『『女らしさ』とは何か」という作品を読んだことがある。大正時代に書かれたとは思えないほど、現代の社会を表現しているようだった。それほど、百年前と現在の考え方が変わっていないということか。

変えることは、難しいのだろう。だから新しい制度や社会を作っていくには草の根的な活動と、政策のように一気に推し進める二つの力が重要だ。調べてみると、普段はジェンダーギャップ解消のためにワークショップを企画し中高生に呼びかけつつ、有識者会議にも参加し、政策提言に携わる団体もあるらしい。変わらないからと諦めずに、こんな風に、両方の側面から進めているのだ。

男女問わず、無意識の思い込みが見受けられないか。例えば、「女子は文系が得意」「男性の方がリーダーに向いている」など。多く転がっている、気づかないうちに、発言しているかもしれないアンコンシャスバイアスな言葉たち。

自分の人生を自分で決めるために、高校生の私たちができること

は、「なじまなくなったこれまでの常識」をよりよくチェンジしていくこと。正解が決まっていないことを議論できる土壌をつくること。多くの分野で活躍する女性、男性を知る機会を見逃さないこと。これからの常識をつくるのは私たちだ。

「男性ＶＳ女性」のような二者択一論的な考え方ではなく、全ての人が良い気持ちで暮らせる社会を作っていかないといけない。情報を敏感にキャッチし、自分なりに考えていこう。高校生だからと尻込みせずに、いろいろなことにチャレンジし、多くのことを学ぼう。そして、未来の世代に多様な生き方を示すロールモデルになっていきたい。